

佐藤春夫「更生記」論

——「狂気」をめぐる語り——

西 川 貴 子

大正末期から昭和初期は、既に先行研究でも指摘されているように「変態心理」やフロイトの精神分析が流行した時期であり、文学の分野でもそうした風潮を積極的に取り入れようとする動きがあった。そのような時期に発表された佐藤春夫「更生記」（『福岡日日新聞』朝刊、昭4・5・27〜10・12）は、単行本が刊行される際の広告で、「狂的なヒステリに対する興味ある精神分析書」（『長篇文庫広告』佐藤春夫『更生記』新潮社、昭5・9・17）という側面と、島田清次郎と舟木芳江との「企められた事件の真相に対し別決のメスを揮った一種の暴露小説」（同）という側面が強調された。現在においても「更生記」はこの二側面から名前が挙げられることが多いが、しかし肝心の作品内容の分析は充分になされているとはいえない。^②

作品内では、島田清次郎と舟木芳江との恋愛事件（以下、島清事

件）は一部分にすぎない。また、この作品がフロイト・ブームを射程に入れて書かれていることは間違いないが、しかし作品内では、精神分析によって問題が解決されるわけではなく、精神分析を行うことによって却って病（狂気）が発見されていく過程が描かれている。むしろ「狂」と「狂」ならざるものとの境界が曖昧になっている有り様こそが露わにされていくといえるだろう。本稿では、これらの点を踏まえ、作品内で「狂気」がどのような形で見出され語られていくのかに注目して考察していきたい。

1 島清事件の取り入れ方

作品の大筋は、簡単に言ってしまうと、「精神病学」の学者・猪股が、ヒステリーの発作を起こす身元不明の令嬢・辰子を精神分析を用いて治療しようとする話といえる。別の言い方をすれば、辰子

を治癒するためにヒステリーの原因（辰子が隠している秘密）を医学生の大場や文士・須藤らの協力を得ながら猪股が探る話ということになる。この辰子の秘密の一つに、若き天才にして「狂人」となった作家・浜地との恋愛事件が絡んでおり、これが島清事件をモデルとしているのである。ただし、作品内ではこの事件は辰子の病の直接的な原因とはなっておらず、事件後、辰子が浜地とは別の男と結婚し、二人の間にできた赤ん坊をその男が殺害して「狂人」となったことが大きな原因として設定されている。最終的には猪股は辰子の秘密を知るが、辰子の病を治し自殺願望を止めることはできず、ちょうど世界一周をめざし東京に來航した飛行船ツェッペリンの姿を見て、辰子は救われたような気になるという形で話は終わる。ここでは、まず島清事件の取り入れ方を見ていきたい。

この事件は、小説『地上』（新潮社、大8・6・10）を書いて一躍ベストセラー作家となり自らを天才と称して数々の奇行を行うなど、事件前から既に新聞種になっていた島田と、名家の令嬢で小説も書いていた兄達を持つ舟木芳江との間で起きた事件であったために世間から注目された。特に、芳江自身が直接発した言葉が公にされないまま、島田が芳江を誘拐監禁したとする舟木家側に対して、芳江とは恋愛関係にあると言い結婚の希望を表明する島田側とで異なる主張がされたため、新聞や雑誌で事件の真相をめぐる島田や

芳江の写真や手紙も公開されながら、憶測が飛び交ったのである。議論のあり方としては、例えば、島田清次郎を批判するもの、同情するもの、芳江を軽率とするもの、二人を結婚させた方がいいというものなどがある^③。ここではそうした島清事件をめぐる数多くの言説の中でも次の点に注意したい。

まず、この事件報道が「一つも其真相を穿たず」（佐野秋紅『内面描写 島田君と舟木令嬢』文正社、大12・5・12）、「蛇の尾に終つてしまつた」（室伏高信『リビドウ原理から見た島清事件の父と娘』『女性改造』大12・6）というように、新聞報道では真相は明かされず有耶無耶になったという認識があつた点である。そして重要なのは、真相に迫るために、事件の中心となる人物達の心理が「変態心理」などの文脈で分析され理解されたということである。例えば「島田の性態を充分に納得せなければ此事件は解し得ない」「此変つた異常の状態を研究することが島田を知ることになる」（佐野前掲書）や、「相手方の退職将官とその若い娘もまた同じ」で、「この事件がフロイド一派の謂うところの libdo と narcissmus の原理によい証拠を与へた」（室伏前掲論文）というように、精神分析の方法で解釈できるといふ考え方があつたのである。特に室伏の論では島田だけではなく、芳江や芳江の父の中にも同様に「ナアルシシズムスとリビドウの二原理」があると意味づけられ、「この事

件は倫理の問題であるよりも心理の問題である。特に精神分析学の問題である」とされることで、一見不可解に思われる彼らの行動も精神分析を用いることで理解でき、真相も解明されると捉えられているのである。島清事件が起きた大正十二年には、医学士が治療と称して性的智識のない良家の令嬢を陵辱した大野博士の陵辱事件などもあり、「性」「性欲」への関心が高まっていた。これらは主に家庭における性教育の必要性を促す形で引用される傾向があつたといえ、フロイトの精神分析によつて真相を解こうとしているところは注目に値する。特に、島田が「早発性痴呆症」と鑑定され入院した事実が知れ渡り、しばしば「狂人」としてメディアで流通していた「更生記」連載時では、島清事件は「変態心理」やフロイトの精神分析、ロンブロオゾオ『天才論』（辻潤訳、春秋社、大15・12・10）などの分析結果を保証する格好の材料だったといえるだろう。島田の状態は「何れが普通人と變つて居るか」と云ふに、其限界は明瞭に説明は出来ない」「別にアブノオマルなこともあるまい」（佐野前掲書）として誰にでも起こり得ることが指摘されていたが、しかし「狂人」島田の奇行が再三取り上げられるなかで、島田は特異な人間として読者の好奇心を満たしていたといえる。このように、島清事件では、事件の真相が事件を起こした人間の心理や性質へとスライドされ、島田や芳江、芳江の父の潜在意識や性質が暴かれる

ことで、とりあえずの決着がつけられていくのである。

島田清次郎と作品内の浜地英三郎を比べてみると、出身地などの細かい点に違いはあるが、事件の経緯の凡そと島田のその後の境遇等は変わっていない^⑥。ただし、事件が起きた年が二年ほど早い大正十年に設定され、辰子の父の死に方も関東大震災であえて避難せずに家族を恨みながら死んだという形に変更されている。また、兄妹が兄一人・妹一人となり、兄の人物像も大きく変えられている。実際の兄（舟木重雄）が父とともに島田の横暴を新聞や雑誌などでも訴えていたのに対して、作品内では兄・青野男爵は厳格な父に反感を持ちつつ逆らえない内気な性格で、事件が恋愛事件だとわかっていながら、誘拐監禁事件として訴える父をとめられず、事件についても口をつぐむ人物とされているのである。先述の通り、島清事件は様々な憶測の中で終息し（既に終わった）こととしてメディアでは片づけられていた。しかし作品内では、一つの事件に端を発して色々な事（父の死、夫による嬰兒殺しと「発狂」）が起こり、それらが積み重なって辰子や青野男爵などの当事者達に八年程経ても影響を与えていることが、明らかにされていく。このように過去が複雑に絡まり合い、青野家自身が秘密を有しているという設定にされることで、猪股による精神分析を用いた辰子のヒステリーの原因（秘密）探しは難渋していくことになる。島清事件を取り上げたメ

ディアのように簡単に精神分析では「真相」は解明されないのである。このことから、「更生記」では、精神分析によって「真相」に迫ることがいかに困難であるか、その紆余曲折の過程に焦点が当てられているといえるだろう。

では、猪股の精神分析の方法とはどのようなものであったのか。具体的に猪股の眼差しについて考えていきたい。

2 精神分析の眼差し

——猪股の眼差しと「記述者」の眼差し

「新聞には本当の事なんてものは一つも書いてはゐない」と言い放ち、「紙背に徹する眼光を以て」読まなければ「真相」はわからないと考えるなど「自分の目」を信じている猪股は、作品内では「目の鋭い怖いやうな方」「明晰な頭脳」を持つ者とされている。猪股が「ウキーン」の学者の報告を読んで「精神分析に興味を持ち、「何か深い秘密を持つ」「その婦人に打明けさせ」ることでヒステリーを治癒しようとする」ことからもわかる通り、猪股の「目」とは同時代の精神分析の眼差しと一致するものであったことは言うまでもない。^⑧例えば猪股が解説する「頭を反らして後頭部と足とで全身を支へて、全身が弓状に張り切つて曲つてゐる」という辰子のヒステリーの症状も同時代の精神分析の書に見られる症状と一致している。^⑨

精神分析は「個体の行動、個体の示す一定の現象の無意識的動機を探究し、之等行動、現象の背後にある原因の連鎖を明らかにする」（丸井清泰『精神分析療法 前編』克誠堂、昭3・8・13）ことを目的としている。しかし「健康者と精神病者の間には、明かなる区画線があるものではない」（同前）。また「如何に極端に、珍奇な、突飛なものがあつたとしても、其れは何れも吾々の常態心理の中に於て、既に其の萌芽を含有してゐるものであつて、全然最初から無かつたものが新たに現出する筈はない」（中村古峽『変態心理講義（変態心理学講義録第一篇）』日本変態心理学会、大10）のである。このように「健康者」と「精神病者」に境界線はなく、「萌芽」にまで気をつけなければならないとするならば、どのような状態が「無意識」なるものの表現で、しかも具体的にはどのような「無意識」として見出し意味づけられるのかを、常に気をつけていなければならないことになる。

したがって、猪股は作品内では絶えず、辰子のみならず周囲の全ての者に対して分析を試み、「無意識」の表れとして病の徴を読み取ろうとする。そのため猪股の周囲には、辰子以外にも、例えば「辰子の兄その人も亦辰子と何等選ぶところなくヒステリー患者に違ひな」と分析するなど、青野男爵や、大場、大場の姉・時子、須藤など、何らかの形で病の徴を持ち「狂気」を秘めている人間は

かりになっていく（猪股がその様に意味づけていく）のである¹⁰。しかし、常に注視し病の徴を読み取ろうとする眼差しは、当然ながら猪股自身にも向けられていく。何事も「単に偶然では済まし切れない」猪股は、「無意識に言つてしまつた一句」を問題にし、「自分の精神分析を試みつつ」、「雑然と切れ切れにさまざまな物が置かれてある」絵を思い出して、自らの心の中に「とり散らした様子」を見出す。また、「父が厳格なら母が甘やかしてゐるだらう」という先入観を青野家に持つたことに對して、幼少時に母と生き別れて見放された猪股自身の「無意識な願望」に拠るものであつたと解釈する。このように、自分にも精神分析の視線を向けていく中で、次第に猪股は辰子との距離感がわからなくなっていくのである。例えば、辰子がハンケチを見て発作を起こすことを知り、その事に関連する夢を見て「一個のヒステリー女の生死などそれほど問題にして、夢の間にも忘れずにゐる事が自分で氣に入らなかつた」と辰子の影響力を自覺していく。猪股にとって辰子は単なる「好奇心」の対象であつたのに、それが「学問的興味」と「人としての多少の同情」の対象と変わり、「今ではどうやら自分自身の苦しみの一部になつてしま」う。猪股と辰子の関係は、単に〈秘密を探る医者／秘密を持つ患者〉、〈見る者／見られる者〉として完全に分斷された関係ではおさまらない状態が生じているのである。

このように、猪股の立場が揺らいでいく中で、猪股は自分の「明晰な」視線をもはや信用できなくなっていく。青野男爵に「あなたの学説は信じますが、御経験は信じない」と不信を突きつけられ、辰子に秘密を語らせることよりも辰子の身の上を知ること必死になつていた「自分の迂闊な態度」に猪股は狼狽する。また「自分の父に似たところのある男子を愛好する」という「フロイド的地」から、「優しく扱ふよりも少し高圧的に命令した方がいゝ」と辰子の取り扱い方を発見するものの、実際に辰子に對峙してみると「どう手をつけていいかわからなくなつて」しまふ。辰子から秘密を聞きだした後も、「なぜ自殺をとめるのか」という辰子の問いに答えることができない。「ヒステリー女のヒステリーの囁言として或る発作さへすざれば自然的に消滅するもの位」に最初は「高をくくつてゐた」猪股は、しとやかな辰子やなまめかしい辰子、自尊心と意志力を発揮した辰子が次々と現れるように感じ、「眞の辰子」がわからなくなる。猪股は辰子を「怖ろしい」と感じ出し、自分の心の中にある「物の怪のやうにかすめる不安」を除去することができないのである。

ところで、作品内では例えば「大場のその報告を一々ここに記入することはさう我々には重要ではあるまい。要するにあの奇異な婦人は猪股が考へたとほりヒステリー患者であつたことが明瞭になつ

た事を知り、序に一週間程の間のその経過を摘記するだけにする」というように、この作品を記述している「記述者」の存在が明示されている。この作品は「記述者」によって再構成されたものが読者へ提示されるという形式をとっているのである。この「記述者」とは、例えば「若しここにもう一人猪股のやうな明敏な人があて、この時の猪股の心理を透察するとすれば、その人は美しい夕方の雲に對する猪股の詩的な一言が、或る意味では猪股の心の空の夕方の雲そのものであつたのに気がつくであらう」と語るように、猪股のやうな「明敏な」分析家であり、猪股と同様に登場人物たちの心理を分析し、さらには猪股さえも精神分析の題材の一例と捉えるのである^⑪。また、浜地と辰子との事件について語る須藤の話は「読者はその煩に堪へないだらう」として、「簡にして要を得る頭脳」を持つ「猪股流に摘要し」て記すことを述べるなど、合理的な語りを心がけているかのように見える。しかし、「記述者」の語りは必ずしも「簡にして要を得る」ものとはなっていない。登場人物達の「無意識」を見出し解説を加えていく「記述者」の語りは、例えば、探偵社に辰子の過去の調査を依頼した猪股の行動の裏に、「電柱の広告の作用」があつたことを明かしたり、辰子を逃がした嫌疑を警察にかけられることを空想する大場の「神経衰弱に陥つた」姿を語ったりしていく。このように「記述者」は辰子の秘密を解き明かす上で

直接関わりがない事も色々語っていくのである。つまり「記述者」は、辰子の秘密を語る上で猪股流の合理的な頭脳で情報を再構成して語ろうとする一方で、精神分析の視線に寄り添った語りを展開していくうちに、辰子の秘密の解明とは無関係な登場人物達の「無意識」に関する挿話も語ってしまうのである。このことを考えた時、示唆に富むのが、須藤初雄の存在である。

3 おしゃべりな語り——須藤の語り

詩人であり文士である須藤は、世間から「高等野人だと評され」浜地と同門であり、「低い塀も壁もみんな淡紅色に塗つてあつた」洋館に小さな犬・狎・鸚鵡・雲雀を飼つて住んでいる。春夫のことを知っている読者であるならば、すぐに須藤初雄が佐藤春夫をモデルにした人物であることがわかるのだが、ここで特に注目したいのは、須藤の話ぶりについてである。猪股は須藤の話を聞いて「まるでロマンティックな小説見たやう」の「一種特有の話風」で「慢性の神経衰弱」に陥っていると分析し、須藤こそ「精神分析をして見る値打」があると考ええる。また、「話は一向とりとめがなく要領を得にくいけれど、あの話風のなかには何となくアトモスフィがある。夫で何とはなしに自然と話してゐることが呑込める」とも指摘する。先述した通り、「記述者」もまた須藤のこの特徴的な語りが、

話の展開上ノイズであることを指摘し抑制しようとしていた。

須藤の話ぶりは特有なもので、一種訥弁の雄弁に属する。(略)

蔓草のやうなあぶなげな話の進展で時々非常な独断を犯し、主観的になる。須藤の口から聞くとそれが不思議な味も無いではないが、それをそのままの形で文字にして再録したのでは、読者はその煩に堪へないだらう、その須藤の談話を幸ひにも猪股助教授は一流の明晰な頭脳によつて聴き取つた。我々も須藤

のお喋りに従ふよりも猪股助教授の簡にして要を得る頭脳に従ふのを便利とする。そこで、今まで須藤の話したところをも、う一度猪股流に摘要しその後の須藤の談話をも、同じ方法で記すとする。^⑭〔人生の不幸〕

しかし話が進み、猪股の精神分析の視線が失調していくと、排除していたはずの須藤の語り、須藤の方法が猪股によつて採用され始めるのである。猪股は「実は私も、いろいろ小説家的にやつて見てゐる」と、須藤のように小説家的な方法で辰子の秘密を探り、辰子の妊娠と関わる人物を探そうとする。^⑮また先にも確認したように、辰子を自分自身の問題として捉え、辰子に対して得体の知れない不安を募らせるようになってくると、猪股は必要以上に饒舌に話している自分に気づく。そして「こんな事は須藤初雄君の言ふことだらうが……」と、いつの間にか須藤のおしゃべりな語り、須藤の思考

法に染まっていることを自覚していく。さらには、須藤のことを「まるで自分に似てゐるやうな氣」にさへなる。また、作品内の「記述者」も猪股の精神分析の視線が失調していく中で、「須藤初雄は例によつて特有なわかりにくい話術で、先刻の狂人の話をはじめた」と、須藤の言葉を抑制せずに、「わかりにくい」と言いつつもそのまま提示するようになるのである。

このように、須藤の語りとは、精神分析を主軸とした猪股や「記述者」の「明晰な」語りとは本来性質を異にするものと捉えられていた。それは「わかりにくい」と同時に「アトモスフィ」「不思議な味」を持つ語りであつた。「私は時々、氣狂ひにひどく共鳴することがあるんです」と「狂人」達への共感を示す須藤の語りは「狂氣」を有する語りに限りなく近いものだといつていいだろう。このことは猪股が作品の前半部で「狂人」の預言者が「莊重な口調」で話すのを聞き、「まるで自由詩とかいふものを読んでゐるやう」だと捉え、「所謂詩といふものも何か精神病学的な一現象ぢやないか知ら」と分析していたことにも繋がる。また、須藤は「狂人」となった辰子の元夫が「女」の声で歌う「バラッド」に強烈な印象を受ける。この詩は嬰兒殺しの歌であり、辰子の秘密の核心に導く伏線ともなっているのだが、しかし須藤は詩の内容自体よりも「女」の「やさしい声」を伴つた「不思議に美しい疊句」に惹かれていくの

である。^⑧

このように、須藤の「アトモスフィア」を有するおしゃべりな語り
が「狂気」の語りに近いものとして位置づけられていることを考え
ると、猪股流の精神分析を主軸とした「明晰」であったはずの語り
も、いつしかこうした「狂気」の語りへと接続していく有り様が、
作品内では描き出されているといえる。そもそもフロイトの精神分
析は同時代において「科学としての体系に欠けて居る」（久保良英
「精神分析学の二分派」『中央公論』昭5・1）という指摘もあり
「ロマンティック」であると同時に『科学』であるという二面性
（一柳廣孝「変容する夢」前掲書）を持つと捉えられてもいた。作
品内でも「記述者」によって「科学と詩との私生児の如きフロイ
ド学説」と指摘されているように、フロイトの精神分析の二面性は自
覚的に取り扱われているといえる。「文学などといふヘンなもの」
を少年時代に勉強したいと思っていた猪股や、「ヘン」と言いつつ、
「グレッツェン」という言葉に「傑作ファウストのなかに出て来る
有名な少女」と解説を加えるなど芸術に理解を示す「記述者」が、
「科学」と「詩」の両方に惹かれるのは当然だといえるだろう。

このように「無意識」を常に発見し、病の徴として意味づけてい
く精神分析の視線は、逆に「狂」と「狂」ならざるものとの境界を
曖昧にさせる。また、そうした視線に寄り添う語りは「狂気」の語

りに近い「詩」の語りとも繋がっていくのである。そして、この
「狂」と「狂」ならざるものとの境界が曖昧となった最たる状態が、
結末部のツェッペリンの来航の場面に表されているのである。

4 「半狂したやうな状態」——ツェッペリンの来航

ツェッペリンが日本に来航し霞ヶ浦を通過したのは昭和四年八月
十九日であった。この来航に関しては新聞や雑誌メディアでも大々
的に取り上げられ、実際に姿を目にすることができた東京の新聞の
みならず「更生記」が掲載された『福岡日日新聞』でも七月後半か
ら連日その情報を取り上げられた。来航の当日は各紙はこぞって号
外を出している（「来たく巨大な雄姿 感激に充ちた霞ヶ浦」『東
京朝日新聞』号外、昭4・8・19）。来航のサイレンが鳴ると、「誰
も彼も窓から乗り出して、それが後になつて問題になつた航路の方
へ去るのを見送つた」（村山知義「現代アナクロニズム情景」『中央
公論』昭和4・10）と語られているように、ツェッペリンの来航に
当時、多くの人達が熱狂していたことがわかるだろう。また「あの
銀光の巨体がいまも絶えずあたまの中のおほ空を飛んでゐる」（土
岐善麿「グラフ・ツェペリン」『東京朝日新聞』朝刊、昭4・8・
23）という発言からも、ツェッペリンを見た衝撃はうかがい知れる。
昭和五年に書かれた池谷信三郎「喜劇ツェッペリン挿話集」（池谷

信三郎全集」改造社、昭9・6・20）は、会社員や借金取り、監視員、少女、一組の夫婦など別々の場で日常を送る人々が、ツエツペリンが現われ「暫くの間、ただもう、すべて意識を吸ひつけられたやうな、妄我的な酔つたやうな感激に浸つてゐる。（可及的に長い間）」を同時に体験するが、「忽ち、又それ〴〵の生活が戻つて来る」という異様な状況を描いている。登場人物の男が「あいつを見ると、みんな頭のどつかが変になりますよ。あいつは魔物だ」と言うように、ツエツペリンは人を一時的な「狂氣」に陥らせるものとして捉えられていたことがわかる。

「更生記」の中でも「満都の人々」が「半狂したやうな状態」でツエツペリンを迎える様子が次のように描写されている。

その日、満都の人々は、今日東京の空に姿を現す筈のツエツペリンを迎へる氣持で、半狂したやうな状態であつた。須藤は朝から次々に來訪した三人の青年にむかつて、

「君は死なうとしてゐる人間に対して、生存を勧告するに適切な言ひ分を持ち合してゐるかね」

と質問すると、誰もそれには満足な返答をしたものはない。その代りに彼等は皆、ツエツペリンの噂をした。（略）下では隣近所の家のなかから、一斉に、ラヂオは刻々に飛行船の通過する場所を報告した。あちらでもこちらでも屋根の上に登

つた人が見えた。（略）——平日ならこれはまさしく狂病院のものだと猪股は思つた。（略）

辰子はあでやかに美しい齒並を見せて笑つた——活々とした瞳を上げて。

「御免なさい。猪股先生、それから須藤先生も。わたくし、銀色にキラキラ光りながらゆつたりと黙つて過ぎて行くツエツペリンのあの姿を思ひ出してゐたのですわ。失礼ながらお二方の御説教よりあの姿の方がわたくしに神と力とを感じさせました」（猪股と須藤）

猪股は人々の熱狂ぶりを「まさしく狂病院のもの」だと表現するが、しかし決して傍觀者ではない。「私も見せてもらはう」と積極的に屋根に上がりツエツペリンを見る猪股も、また「ツエツペリンを見ないで、客を接見する氣にはなれなかつた」須藤も、共にこの「半狂したやうな状態」に陥つていたといえるだろう。辰子をはじめ猪股や須藤の「狂氣」は、この「半狂した」空間の中に吞み込まれ、同様の「狂氣」を皆と共有していくことになる。日常の中において、何かの拍子に「狂」と「狂」ならざるものとの境界が崩れ「狂氣」が溢れていく瞬間があること——辰子も猪股も須藤も特別な存在ではなく、誰もが「狂氣」と隣り合わせにあることが結末部では暗示されている。特に春夫をモデルとする須藤に「狂氣」を見

出させていたように、〈誰も〉の中には当然「作者」（佐藤春夫）も含まれており、「作者」が自らの「狂」的な部分も引き受けると同時に「読者」にもそれが他人事ではないことを突きつけていたといえる。

フロイト・ブームの中で、「意識の下層に埋もれた無意識界こそ我々の生命の本源」（長田秀雄「無意識心理論」（『新潮』昭4・10）で「人生の真実に徹することが出来る」（同、「最も本元的な文芸の科学」（大槻憲二「精神分析せられた名作」『新潮』昭4・11）として精神分析が同時代の文学の場で期待されていた時、春夫は精神分析では「人生の真実」に迫ることができず、「狂気」を解消することができないことをあえて精神分析を用いながら明示し、「狂気」が語り出されていくその過程を執拗に描き出していった。「個人を描く文学に於ては、多分心理学あるひは精神分析学から出発した美学でなければ完全に評価は出来ないだらう」（『個人的文学、社会的文学』『芸芸都市』昭和4・6）と言っていた春夫は、もちろん精神分析を全て否定していたわけではないだろう。春夫が疑義を呈しているのは、島清事件で見られたような精神分析を用いさえすれば「真相」「真実」が明快になるとする考え方にだったのではないか。そして、だからこそ作品内で「狂人」が二人も出てくることや「人物がみんな一癖あつて、それが、みな同じやうな型ばかりで。まる

で、ひとりの人間を、八面鏡にうつしたやうな図」になっている状態を須藤に「小説としては」「まづい事だらけ」だと言わせ、自己言及的にこの作品自体を批判させたといえる。精神分析を扱う小説が結局、「狂気」を溢れさせていく（「狂人」を作りだしていく）、見方によっては「まづい」ものとなることを指摘し揶揄することで、同時代における精神分析への過剰な期待から距離を取ろうとしているといえるだろう。

「更生記」は、「科学と詩との私生児の如きフロイド学説」という言葉に象徴的なように、「科学」と「詩」（「狂気」）とがまさに結びつくあり様そのものを、ツェッペリンや精神分析といった当時最も話題性があつたモチーフを取り入れ、「科学的」なるものに沸き立つ同時代の人々の気分を掬い取りながら、浮彫りにしようとした作品なのである。

注

- ① この時期の「変態心理」や精神分析の流行に関しては、一柳廣孝「無意識という物語」名古屋大学出版会、平26・5・20）、曾根博義「フロイトの紹介と影響——新心理主義成立の背景」（昭和文学会編『昭和文学の諸問題』笠間書院、昭54・5・25）などに詳しい。
- ② 例えば、曾根前掲論文ではフロイト・ブームの中で発表された作品として取り上げ、興味は「もっぱらヒステリーの解釈と治療法だけに向け

られ」「フロイトの理論を体系的に摂取しようとする姿勢はなかった」としている。また新田篤「佐藤春夫『更生記』における精神分析と精神医学」『精神医学史研究』平24・10）では、作中の精神分析や療法がフロイトやクレッペリンの説、下田光造、杉田直樹『最新精神病学』における療法と一致すると指摘されている。その他「島田清次郎 評伝人と作品（小林輝治編『石川近代文学全集4』石川近代文学館、平8・3・1）で島田清次郎の資料として参照されている。なお、海老原由香は口頭発表「『更生記』の再検討」（日本近代文学会十一月例会、平12・11・25）で、この作品が探偵小説、心理小説、社会小説、教養小説の多要素を持つと指摘した。

③ 「女学生が偽はらぬ島田事件の批判」（『読売新聞』朝刊、大12・4・26）には、芳江への批判や二人の結婚を説くものがある。この他、島田に同情を示すものに「自称天才の末路 精神病院に泣く島清君」（『丘緑』東京）大正13・12）などがある。

④ 吉岡房子「家庭と学校で如何に性教育を授くべきか」（『婦人世界』大12・5）など。

⑤ 藤原英比古「狂人となつた島田清次郎君を精神病院の一室に訪ふ記」（『主婦之友』大13・12）、中山啓「島田清次郎君の発狂」（『脳』昭2・8）など。

⑥ 事件に関して実際の島田と作品内の浜地とを比較して簡単に整理すると次のようになる。

出身地	事件前	事件	事件後	
島田清次郎 石川県金沢	生田長江の推賞で『地上（第一部地に潜むもの）』を出版 洋行中、イギリス人の女優ミス・マーガレットに求婚されたと語る	年月：大正一二年四月 泊まった場所：逗子・取調べ：葉山署 摂政殿下が葉山から帰京 対応：舟木家が島田を告訴。 兄・重雄、島田もメディアで発言。島田が徳田秋聲と弁護士 の勧めで芳江の手紙を提出。新聞にも公表↓島田の謝罪状と小説にこの件を書かないことを条件に舟木家告訴取り下げ	『我れ世に敗れたり』を出版 『早発性痴呆症』の診断。果 鴨保養院入院	島田清次郎
浜地英三郎 北海道小樽	石田氏の推賞で『太陽の照すところ』を出版 洋行中知りあつた若い女優と結婚するかもしれないと語る	大正一〇年一月 泊まった場所：小田原 高貴な方が御用邸へ来る日取 青野老男爵（父）が新聞で浜地を批判↓青野家が浜地を告訴↓浜地が時岡鶏鳴の勧めで辰子の手紙を裁判所に提出↓青野家は告訴取り下げ	『敗けたる者』を出版 『狂人』となり入院	浜地英三郎

⑦ 「泣いて妹の為に」（『婦人世界』大12・6）など。さらに「事件の真相について御再考を乞ふ」（『非売品』）を作成し友人に配布している。次兄の重信はこの時、留学中だった。

⑧ 「『ヒステリー』患者は、過去の追憶に悩めるものであると云つてもよい。この追憶を之に伴ふ適当な興奮と共に、意識に持ち来し、これを正常的に消え失せしむる事が出来れば治癒が起る。換言すれば閉ち込められて居た感情が、意識界に持出され、言葉になつて現はれ、或は医師の暗示によつて除かれるのである」(丸井清泰『精神分析療法 前編』克誠堂、昭3・8・13)。

⑨ 「時としては患者の身体は半円形に曲つて頭と爪先で立つてゐるやうな奇体な形をすることがある」(コリアット『愛慾心理学 佐藤亀太郎訳、大日本文明協会、大7・3・30)。

⑩ この他、時子は「辰子の影響をうけてよほどヒステリックになつてゐる」とされ、須藤は「慢性の神経衰弱」とされる。大場には「かういふ状態に君を五時間ほど置くと君の神経衰弱を昂じさせて、君はヒステリックになる」と言い、病の徴候を読み取っている。

⑪ 「猪股は無意識に彼の少年時代の文学に対する憧憬を再び思ひ出してゐたのである。(略)少年時代の夢想が人の生涯に於て事毎にどれだけ有力に作用するかの実例の一つを人々は猪股に見るであらう。」(『夕方の雲』)

⑫ 島田と同門という事や、春夫の「自分は一介の野人である」(芥川龍之介を憶ふ)『改造』昭3・7)という発言、「小説家で赤い家と云へば佐藤春夫の家はすぐわかる赤い家、それは赤壁の家なのである(略)人と鳥とが一つ生活の中にあるやうで来客の眼を驚かす」(佐藤春夫氏座談)『読売新聞』朝刊、昭3・8・5)などの記事と対応する。

⑬ 作品内では他にも以下の人物に実在のモデルがある(一)内が実在の人物。石田氏(生田長江)、時岡鶏鳴(徳田秋聲)、須藤三男(佐藤雄雄)傍線引用者。以下同じ。

⑭ ただし、この時は猪股もすぐに現実には小説と違つて「現実では不可

能」だとし、須藤の方法を切り捨てていくのだが、結局は「小説」のうちに辰子の赤ん坊の父として浜地とは別の人間の存在があったことから、須藤の小説家的な方法は作品内では否定されていない。

⑬ 「彼女は日影で幕を掘り上げた。／(日は美しくカーライルの壁に照り)／それからそこへ可愛い児を埋めた。／(さうして獅子はみんなの王様だ)」という形で「晝句と本文の物語との間に何の連絡もない」(小泉八雲『英国のバラッド』『小泉八雲全集 第十六卷』第一書房、昭2・9・5)この詩(『酷い母』"The Cruel Mother")は、須藤の気儘なおしゃべりにも通じるといえるだろう。

⑭ 「Z伯爵来航記念 ツエッペリン画報」(道永悌三編、帝国飛行協会、昭4・8・17)などの特集も出版され、来航に際してはサイレンが鳴らされ、J O A K による中継もされた。

⑮ 例えば「精神分析をされた女の話」(『新青年』昭4・9)は、一方的に男性に別れを告げられ失意の底にあった女性が精神分析学の博士に診察され「潜在意識」を知り、自分をコントロールする術を覚えることで、別れた男と再会して幸せになり、その後も二人の間で問題が発生すると博士の診察によつて解決しているという経験談風の話である。

〔付記〕 本稿は慶應義塾大学国文学研究会(平21・11・9)で報告した口頭発表「佐藤春夫『更生記』論」を原形に、新たに考察を加えたものである。発表内外で貴重なご助言を頂いた。心から感謝申し上げます。

本文の引用は『定本佐藤春夫全集 第七卷』(臨川書店、平10・9・10)に拠る。引用に際し旧字は新字に改め、振り仮名は適宜省略した。